

注目 集まる プロポリス

昨年の新型インフルエンザウイルスの猛威は記憶に新しいが、最近では毒性の強い鳥インフルエンザウイルスが、人に感染しやすくなる性質を獲得する可能性が高まったことが報道された。また、今夏の猛暑により来春の花粉飛散量は例年の2倍近くになることが予測されている。免疫に作用する素材に注目が集まる中、プロポリスはエビデンスを揃え市場ニーズに対応する。メーカー・サプライヤーの動向をレポートする。

8月末の一部報道では、毒性 の家畜の豚から7.4%という 高い頻度で検出され、同ウイルスが豚体内で人に感染しやすくなる性質を獲得する可能性が指摘されたという。一方、国内では政府からの助成金を得て、大手製薬会社が新型インフルエンザワクチンの生産、販売に乗り

出すことを発表した。また見ぬウイルスに対する警戒は、かつて無いほど高まっており、民間レベルでもウイルス対策は必要不可欠と考えられ始めている。また、今夏は異常気象により観測史上『最も暑い夏』となったことで、来春の花粉飛散量が

多くなることを東京都やNPO花粉情報協会では予想。同協会では「スギの雄花が発芽する7月上旬から8月上旬にかけての気温が高く、日射量も多かったスギの雄花を観察したところ相当数発芽しているのを確認しており、来春は例年の2倍近く飛散する」と話す。

このため、来春先にかけては免疫に働きかける素材に注目が集まると想定される。特に、プロポリスは複数の企業で免疫賦活による抗インフルエンザウイルス作用が認められている他、花粉に対しては山田養蜂場が炎症関連物質であるcys-1ロイコトリエンの放出を抑えて作用することを確認するなど、エビデンスが蓄積しており、より一層注目が集まるとみられる。



花粉、インフルエンザ 対応研究データも蓄積

現在のプロポリスの市場規模は末端で約300億円と言われ、チンキやソフトカプセルの高額品が主に流通していることから、堅調に推移していると思われる。その中で、最近では通年の定番商品となった感のあるど飴の売上が伸張する。「ど飴は、プロポリス特有の味と臭いを抑えているため消費者にとっては導入品となり、今後の市場拡大に繋がる」(業界関係者)と二次的な効果に期待を寄せる声も多い。日本自然療法では、9月からショウガやオレジン、ブルーベリーで風味付けした新商品を市場投入。日本プロポリスはグミカプセルタイプで、幅広い年代層に訴求する。

原料でも、採用増加に繋がるような技術開発や研究が行われている。ニュージーランドのマヌカヘルス社製プロポリスを供給するシクロケムは、ACDで

包接することで味や臭いを抑える他、吸収性を高め、水分散性が向上することを確認し、他のサプライヤーにも包接化を提案。富士見養蜂園はプロポリスの成分を丸ごと利用できる超高压抽出による原料を開発した。アマゾンフードは5種類のプロポリスを組み合わせた「AP-08」で、紫外線による腫瘍の抑制作用が示唆される結果を得ている。

昨今では、体力や免疫力が低下した入院患者等に日和見感染する多剤耐性菌「アシネットバクター」の存在が明らかになり、秋の花粉のフタクサ等に注意が呼びかけられている。メーカーやサプライヤーにとっては、これまで積み上げ、重ねてきた実績や研究の成果を発揮する得難い好機と考えられ、今後の動向が注目される。

ACD包接プロポリスを提案

シクロケム(神戶市中央区)は、ニュージーランド・マヌカヘルス社製プロポリスをケループ会社のコサナで販売している他、アシクロデキストリン(CD)包接による機能・汎用性向上のデータを蓄積している。

シクロケムはCAPEなどの脂溶性成分が多く含有する取り扱い困難な同プロポリスのACD包接による安定化、吸収性、水分散性など様々な物性変化を検討し、同プロポリスを機能性向上できることを明らかにし

た。プロポリスは主に国内ではエタノール溶液、海外ではPG溶液として用いられるため用途が限られる。そこで同社はACD包接化による物性を評価し、包接プロポリスは独特の後味や臭いが抑えられ、水分散性も向上して飲料用途にも利用できるなど汎用性が高まることも確認した。同社はこの知見をもとに、他のサプライヤーのプロポリス包接化の検討にも積極的に協力していく。